様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２５ 日現在

機関番号：３２５０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２７５８

研究課題名（和文）異文化交流環境における英語運用力の向上を目指す活動設計と実践研究

研究課題名（英文）Designing a better intercultural exchange project for improving communication skills in English

研究代表者
山内　真理（Yamauchi, Mari）

千葉商科大学・商経学部・教授

研究者番号：４０４１１８６３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：オンライン異文化間交流において，ビデオ通話を利用した活動は関心と参加意欲を高めうるが，英語でのコミュニケーションの経験がない日本人学生にとって同期型コミュニケーションは緊張や不安が強まる形態でもある。本研究では，ビデオ通話の利点を生かした「グループ動画をベースとした非同期型コミュニケーション」が参加を容易にし，英語への苦手意識を払拭するのに役立つことを確認した。ただし初対面でのやりとりやミスコミュニケーションへの対処等の授業内支援の必要性も示唆されている。技術面では特殊なスキルは不要であり，非英語専攻学生対象の一般英語の授業にも取り入れやすいオンライン活動であると言える。

研究成果の概要（英文）：In an online intercultural exchange, video chat activities can help increase participants' interest in their partners and motivation to join the project, but the synchronous communication can increase the anxiety level for Japanese students students who have not communicated in English before. As this study confirmed, "asynchronous communication using group videos," with similar advantages of video chats, facilitated student participation in the interactions and helped them overcome their low L2 confidence. The importance of helping participants in class to interact with new people and to deal with miscommunication was also suggested. In terms of technology use, this asynchronous video-based communication, requiring no special skills, is an easy online activity that can be used in general English language courses for non-English majors.

研究分野：英語教育

キーワード：Virtual Exchange　L2 Confidence　WTC　動画利用

１．研究開始当初の背景

(1) 日本人英語学習者は EFL (English as a Foreign Language) 環境，すなわち学校の授業以外では英語を使う必要がほとんどない環境におかれ,英語の使用経験が不足しがちである。とはいえ ICT の発達により，学習者が英語使用者と交流を持ち，英語を使う経験を積む環境を用意すること自体は容易になっている。実際,平成 23-25 年度の科研費研究「発信/交流型英語活動を軸とする ICT 活用授業の実践モデルの構築」(課題番号:2352069，代表:山内真理)では，そのような環境を提供し，授業と連動する交流・協調活動の実践を行ってきたが，そこで確認されたように，実際に「通じた」経験を重ねることが英語によるコミュニケーション不安の軽減と学習意欲向上に極めて重要である。

(2) (1)の研究の一環として行った異文化交流を組み込む授業設計に関する実践研究では，ビデオ通話を利用した同期型コミュニケーションの参加促進効果が高く，文字主体のコミュニケーションよりも「伝えやすい」「理解しやすい」と感じる者が多いことが確認されている。映像付き同期型コミュニケーションで伝わるパラ言語・非言語情報が，言語の壁を超えて好奇心をかきたてる印象深いコミュニケーション活動を可能にすると考えられる。一方で，なじみのない相手とやりとりを始める，ミスコミュニケーションに対処する，異質な事柄に対する判断を保留するといった，社会的スキル(菊池 1998，相川 2009)や異文化間能力(Byram 1997，INCA Project 2004，Verjans，et al. 2009)の領域での未熟さが，日本人参加者たちの参加を妨げる要因となりうることが示唆された。

２．研究の目的

(1) 本研究では，英語使用と異文化接触の機会としての Virtual Exchange (以下 VE)の利点を十分に活かし，そこでの経験を通じて，英語運用能力を含む異文化間コミュニケーション能力（Byram,1977）の基礎を養成することを目的とした。具体的には，上述のビデオ通話の利点や社会的スキルの未熟さなど，英語での交流活動への参加度に影響しうる要因を整理，検証し，それらに配慮して，本研究の対象となる CEFR 基準で A1-A2 レベルの英語学習者に適した VE プロジェクトを設計することを課題とした。

(2) 交流活動の設計にあたっては，学生個人の携帯端末を利用する，いわゆる BYOD (Bring Your Own Device) 環境を想定し，特に技術的な面で教員にとって活用しやすい VE 実践例の提示も目指した。

３．研究の方法

研究初年度に，筆者や交流パートナーの担当科目の変更があり新たな相手国との時差のため授業内でのビデオ通話が実質不可能になったことから，撮影した動画を共有する非同期型コミュニケーションのタスクを思考することとした。動画利用タスクを採用する上で，Moodle を利用した場合のサーバー管理と動画アップロードの手間を勘案し，本研究に関しては Moodle の利用は最小限に止めることとした。軌道修正後の交流実践の概略を以下に示す。

(1) <u>交流プロジェクトの概要</u>

研究期間に実施した英語での VE プロジェクトは下記の通りである。

- 対象科目：一般英語（必修科目；1 年後期）・異文化コミュニケーション（ゼミ科目；2 年前期，2 年後期，3 年前期）
- クラスサイズ：20～25 名であり，習熟度別にクラス編成された「一般英語」では学生間の英語力の差は小さい（CEFR の A1～A2 程度）が，「異文化コミュニケーション」ではばらつきが大きい（CEFR の A1 未満～B1 以上）。

- 交流相手とプラットフォーム：インドネシアの英語学習者(Facebook)・コロンビアの英語学習者(Moodle; Moodle + Facebook)・フィンランドの日本語学習者（Facebook)・アメリカの日本語学習者（Facebook)

なお，上記の Moodle は筆者の管理するサイトではなく，大規模な VE プロジェクト（Hagley & Haidee, 2017）専用の Moodle サイトである。

(2) 観察および調査項目

VE プロジェクト実践において下記のような観察・調査・評価を行った。

- 質問紙調査（事前事後）：初歩的社会的スキル 5 項目（菊池 1998）の自己評価；VE 関連項目（異文化交流への関心，SNS 利用に対する意識など）；英語運用力についての意識（自信・不安）
- VE タスクの評価：指定トピックでのやりとり（全体 vs 全体；混合グループ内）；メディア比較：テキスト＋写真 vs グループ動画
- VE 前活動とリソースの評価：流暢性向上の活動（口頭・作文）；VE プロジェクトの目的（Johari Window と自己紹介など）；日本文化・日本の生活（読み物・動画）相手文化の基礎知識（地理・産物など）；文化比較調査と発表（グループ課題）；Country Comparison と Culture Compass (Hofstede Inside); World Value Survey (Inglehart, R., et al, 2014)
- 授業内活動とその支援と観察：動画作成準備・投稿・視聴活動；コメント作成；ミスコミュニケーションへの対応；パートナーへの明確化要求および自身の発話の修正
- VE 後タスク（グループディスカッション・発表と 個人レポート）の成果物分析：自他文化比較（事物・言語使用・コミュニケーションスタイルなど）；メディアの違いとコミュニケーション；異文化間コミュニケーションの自己評価；英語学習方法の内省と比較

ただし，全ての VE プロジェクトでこれら全てを行ったわけではない。例えば 2017 年の交流ではグループ動画のやりとりを中心に行ったが，2016 年の交流ではオプションであった。質問紙調査の項目も改訂しており，関連資料も随時追加・更新している。

４．研究成果

(1) 流暢さのための活動と外国語不安軽減・言語産出量増加

2015 年度に対象とした「一般英語」は習熟度別で編成され，このクラスの受講生は，少なくともリーディングについては A2 以上の力を持っているが，発話活動では A1 レベルのタスクにも苦労するという傾向が見られる。産出活動の練習・経験不足が原因だが，外国語不安も高く授業内の発話活動にも抵抗があるため必要な練習・経験を積むことができない。

2015 年度は前期に①4/3/2 technique (Nation & Newton 2009)を応用した「30 秒 x3 トーク」と②分量重視の手書き作文という 2 種類の流暢性向上の活動を実施し，①が発話活動に対する不安の軽減，親密度向上，発話量増加に，②が時間当たりの産出量増加に役立つことを確認した。①については授業内の観察にとどまり，2016 年度に検証する予定であったが担当クラス変更によりかなわなかった。

(2)「多対多」のインタラクション管理

2015 年度の後期はテキストベースの VE プロジェクトを 2 件実施した。Facebook Group を利用したインドネシアとの交流と，Moodle を利用したコロンビアとの交流(Hagley, Eric, 2013-2015，オンライン「国際協力的」と「国際共同的」語学学習方法の比較，科研費研究課題番

号:25370613) である。

いずれの VE でも授業でカバーしたトピックについて文章に写真等を加えて投稿することを課題とした。受講生たちは毎回 50-80 語程度のメッセージを投稿し，内容面でも努力が認められたものの，やりとりが 2 ターン以上続くことは少なかった。その理由の 1 つとして「多対多」であることから，一度に多数のスレッドが立ち上がる形になってしまうことがあげられる(Moodle サイトの方はその後バージョンアップし，特定の投稿をフォローすることが比較的容易になっている)。Facebook Group では，教師が立てたスレッドに学生がコメントを加えていく形を試し，翌年以降の Facebook 利用の VE では，これに加えて，日本側と相手側の混合グループを作ることで同時に立ち上がるスレッドの数を抑えた。さらに投稿にタグ付けすることにより「多対多」のやりとりをフォローしやすくしている。

(3)動画ベースの非同期型コミュニケーション

2016 年度と 2017 年度の VE プロジェクトは，異文化コミュニケーションのクラスで実施した。同期型のビデオ通話の問題点を考慮し，コロンビア，フィンランド，アメリカをパートナーとした 2016 年度以降の VE では，Facebook Group での動画を用いた非同期型コミュニケーションを採用した。自分を撮ること自体に抵抗をもつ者もいることが予想されたため，動画作成は原則グループ課題とした。

2016 年度の動画利用は任意であったが，2017 年度はグループ動画の投稿をメインの課題とし，英語表現や何をどう見せるかについてもグループ内で吟味・工夫させた。なお，2016 年度はコロンビアとの Moodle での VE (Hagley, Eric, 2016-2018, 多文化バーチャルエクスチェンジ学習の促進とその質的改善，科研費研究課題番号:16K02875)も並行して行ったが，2017 年度は Facebook Group での VE に絞っている。

(3a) 2016 年度は，グループ動画を作成共有しコメントし合う活動により英語使用および SNS 利用に対する不安が軽減されること，パートナーの動画が親近感向上に寄与することが確認された。また VE プロジェクトの前後で，異文化接触および英語でのコミュニケーションに対する関心や意欲も向上している。ただし，「自分の英語で意思疎通は十分にできると思う」(話し言葉/書き言葉)という項目については事前事後とも 5 段階中 2 ポイント前後と低く、一部をのぞいて，英語力に対する自信のなさについては大きな変化は見られなかった。

(3b) グループ動画の作成・投稿を軸とした 2017 年度の VE では，異文化接触および英語でのコミュニケーションに対する関心や意欲が向上した(又はその高さが維持された)だけでなく，自分の英語力に対する自信の点で向上が見られた。事前事後のアンケートに答えた日本人だけを抽出して両年度の事前事後を比較すると(2017 年度のクラスには中国人留学生 7 名が含まれる)，事前調査では話し言葉・書き言葉のいずれについても低く(2.08)，2016 年度との間に有意差は見られないが，事後調査では，話し言葉・書き言葉のいずれも 2.75 であり，2016 年度の事後と比べて有意水準 5%で有意差が確認された(話し言葉：$t\ (25) = 2.31$, $p < .05$；書き言葉：$t\ (25) = 1.72$, $p < .05$)。

(3c) 動画利用に関する自由記述から，参加者が感じた動画利用のメリットとして，内容の面白さや分かりやすさ（動画を見るのも撮るのも楽しかった・文章より動画のほうがわかりやすくコメントもしやすかった)，非同期型性(リアルタイムで話さないのでリラックスできた)，生の英語に触れる機会，臨場感・親近感，アウトプット練習の機会が挙げられる。動画は，非言語情報を含めて様々な情報を伝達できるメディアであり，言語的な表現力が未熟な外国語学習者でも

内容のあるコミュニケーションが可能になる。その意味で自信のない英語学習者が英語使用経験を積むのに適したメディアであると言えよう。

(4) 情意フィルターの軽減

2016 年度は，VE プロジェクト後にリフレクションエッセイ(上記 2(4e))を課した。74%が何らかの情意フィルターに言及し，それが VE を通じて軽減されたことを論じていた（英語でのコミュニケーションに自信がない，文法が合っているかが気になる，知らない人だと話題を考えすぎてしまう，人前で書くのも抵抗がある，嫌われたり迷惑に思われるのではないかと思っていた等)。

(5) 談話スキル・ミスコミュニケーション対応の指導

(5a) 2016 年度，2017 年度とも投稿行動を観察していると，相手のメッセージに対して新しい情報を何も付け加えない応答が散見された。これに間違いを恐れる気持ちが加わると非常にそっけないメッセージになりかねない。本研究期間では随時取り入れたにとどまるが，「一言加えてみる」「質問を考えてみる」タスクを含む明示的な指導を初期段階で取り入れたい。

(5b) 明確化要求などの意味交渉(Long 1983)も行い慣れていない様子が観察された。英語表現に自信がないか，聞き返したら失礼になるのではという気遣いがその一因と考えられる。明確化要求や相手に伝わっていない場合の言い直しはミスコミュニケーションの解消にとって必須の行為であり，やりとりをより活発なものにするために VE の準備段階に指導を組み込む必要があるだろう。

(5c) 2017 年度は「言語交換」の要素があったため，言語の間違いを修正する柔らかい言い方を明示的に指導したが，「間違いを指摘する」ことが失礼になるという心配が想定以上に強く，結果的にアメリカ人学習者が求めている情報を十分に提供できないことになった。言語交換要素を含む VE の場合，間違いの訂正行動もタスク化するといった工夫が必要と思われる。

(6) VE と異文化間能力養成

2016 年度の VE プロジェクトでは，異文化接触での気づきを言語化するグループ・リフレクションや，パートナーとの異文化比較アンケートとそれに基づく混合グループでのリサーチ等の活動により異文化理解や文化的気づきを深めることができた。一方，2017 年度は英語学習活動の比重が大きく，流暢さ向上のための発話活動や英語でのグループ発表などを経て，英語での発信活動にある程度慣れた状態で VE に臨むことができた。今後も，異文化理解の活動と英語活動の比重を学習者や授業の目的に合わせて調整しながら，動画を取り入れた VE プロジェクトがより有意義な学びの場になるよう検討を重ねていく。

(7) プラットフォームとリソース配信

動画を多用するに当たって本研究では Facebook Group を利用した。そのメリットとデメリットをまとめておく。

(7a) メリット

- 現時点では，他のツール(Moodle，Edmodo，Evernote，LINE)と比較して最もストレスなく動画共有を行える。
- 学生が自分のデバイスを使って動画を作成・投稿し，閲覧・コメント投稿を容易に行える。
- 動画管理のスペースの心配がいらない。
- 設置が容易で，特別なスキルは不要である。
- 無料である。
- 投稿した動画は，投稿者本人以外はダウンロードできない。
- リンクを整理しておくことで一応のリソース管理が可能である。

(7b) デメリット

- 成果物（動画など）の評価を Group 内で行う仕組みがない。
- 学生の使い慣れたツールではなく，特に Group の利用は知られていない。
- リソースの配置の自由度がない。

Facebook Group の採用は，動画共有を主体とする VE において重視した特徴((7a)下線部)を備えていたからである。パートナー探しや授業への組み込みを考えると，特別なスキルなしに容易に利用できるという利点も大きい。こうしたコミュニケーションツールは日々改良が行われ進歩しているため，引き続きより使いやすいツールを求めていく。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 2 件）

① 山内真理.(2018). 動画ベースの異文化交流プロジェクト．千葉商科大学紀要，55(2)，89-104.

〔学会発表〕（計 12 件）

① Yamauchi, Mari. (2018). Benefits of asynchronous video-based communication for FL learners. EuroCALL 2018, 2018.08. 22-2018. 08.25, Jyväskylä.

② Suzuki, Kazuko & Yamauchi, Mari. (2018). Designing a virtual exchange project using video-based communication on Facebook. JALTCALL 2018, 2018.06.08-2018.06.10, Nagoya.

③ Yamauchi, Mari. (2017). Effective mix of language learning activities with or without technology. GloCALL 2017, 2017.09.07, Brunei.

④ Yamauchi, Mari. (2017). How Virtual Exchange can help prepare Japanese students for intercultural communication. EuroCALL 2017, 2017.08.24, Southampton.

⑤ Yamauchi, Mari. (2017). Preparing Japanese Students for Intercultural Communication through Virtual Exchange. Asia-Pacific Virtual Exchange Association (APVEA) 2017, 2017.03.25, Princeton.

⑥ Yamauchi, Mari. (2017). Learner-centered technology integration in the EFL classroom. 2017 International Conference on Humanities, Social Sciences and Education (ICHSSE-17), 2017.01.16, Pattaya.

⑦ Yamauchi, Mari. (2017). Learner differences in Virtual Exchange: Toward a better program. International Conference on Arts, English, Literature and Religious Studies (AELRS-2017), 2017.01.09, Bali.

⑧ Yamauchi, Mari. (2016). The impact of fluency-building activities on students' WTC. Asia TEFL 2016, 2016.07.01, Vladivostok.

⑨ Yamauchi, Mari. (2016). How to help them speak up: a first step toward a better mix of modalities. JALTCALL 2016, 2016.06.05, Tokyo.

⑩ Yamauchi, Mari. (2015). Implementing an intercultural virtual exchange. The 2nd International Seminar on Linguistics (ISOL-II), 2015.08.23, Padang. Proceedings of the 2nd International Seminar on Linguistics, 255-259.

⑪ Yamauchi, Mari. (2015). Incorporating intercultural experiences into the curriculum. Asia-Pacific Virtual Exchange Association (APVEA), 2015.07.19, Muroarn.

⑫ Yamauchi, Mari. (2015). BYOD integration in the EFL classroom using Moodle. JALTCALL 2015, 2015.06.06, Fukuoka.

６．研究組織

研究代表者

山内真理（Yamauchi, Mari） 千葉商科大学・商経学部・教授

研究者番号：40411863